Philippines EX. 2020

From I.S.A.　　2020/03/01～03/06

≪団長挨拶≫

神戸支部　米谷　萌

今回、フィリピン Ex.の団長を務めさせていただきました、神戸支部 2 回生の米谷萌です。
私は団長に指名されたものの、このフィリピン Ex.が I.S.A.での初海外プログラムであり、人生初の東南アジア渡航だったため、さまざまな不安がありました。それに加え、今回は 1 回生かつ、初の I.S.A.プログラム参加の後輩が多く、そのようなまだ右も左もわからない後輩を、団長または一先輩としてどのように引っ張っていったらよいのか、日々自分なりに考え、奮闘していた約 4 ヶ月間でした。

そして、今年はかなり特殊な状況下での開催でした。タール火山の噴火や、コロナウイルスの影響などにより、参加人数も結団式当初から減ってしまいました。実際、そこまでのリスクを背負ってまで開催する意義があるのか、という厳しい声もあり、自分自身でも今回の開催が正しいことなのか何度も問い直し、悩み、葛藤しました。正直なところ、会期中もずっと心に引っかかっていましたが、会期を終え、私は開催してよかったなと心から思います。

プログラム期間は短くなってしまいましたが、この 7 日間は私達にとってとても濃いい日々でした。会期後に「最高の Ex.やった」「連れて行ってくれてありがとう」などの言葉をもらえたり「次は夏のプログラムの実行委員をしたい」と、これからの I.S.A.活動に意気込む後輩の姿をみれたり、現地で得られた知識、繋がり、刺激はそれぞれの心に響いたようで、団長として、今回のフィリピン Ex.が参加者にとって意義ある経験になったことにとても嬉しく思います。

そして、今回の開催にあたって、現地のオーガナイザーである Mardi さん、コーディネーターの Krishna、I.S.A.の代表である会長をはじめ、本当に多くの人に支えられました。感謝の気持ちでいっぱいです。
コロナウイルスが少しでも早くおさまること、そしてこの素敵なフィリピン Ex.がこの先もずっと続いていくことを願っています。

≪ＥＸ．概要≫

＊開催の目的＊

マニラやネグロス島の観光でフィリピンの歴史を、ファームとシティでの生活体験を通して、フィリピンの生活、文化、国民性などを学ぶ。また、フィリピンの学生との交流で相互理解を深める。

＊協力者＊

Mrs.Mardy Mapa
Ms.Krishna Ariola

＊場所＊

フィリピン共和国　マニラ市、ネグロス島

≪参加者リスト≫

名前	支部・学年	役職
米谷　萌	神戸支部　２年	団長
高橋　菫	神戸支部　２年	合宿
児嶋　桜	九州支部　２年	広報
野口　綾乃	大阪支部　１年	文化紹介
藤本　優梨花	神戸支部　１年	広報
北村　美帆	神戸支部　１年	勉強会
津田　理々香	神戸支部　１年	財務
藪内　冠太	大阪支部　４年	報告書

≪スケジュール≫

Date	Place	Accommodation	Activity contents
Feb.29th	マニラ	ホテル	前入り
Mar.1st	マニラ	ホテル	オリエンテーション、マニラ観光
Mar.2nd	マニラ→ネグロス島	ファーム	ホストファミリーと会う
Mar.3rd	ネグロス島	ファーム	さとうきび畑とマングローブへ行く
Mar.4th	ネグロス島	ファーム	小学校へ行って文化紹介
Mar.5th	ネグロス島	ファーム	村でお別れ会
Mar.6th	ネグロス島	ホテル	バコロド観光、フェアエルパーティー

≪持ち物リスト≫

必需品

・虫除け、かゆみどめ
・ビーチサンダル
・薬
・洗面用具
・絆創膏
・着替え多目に(長袖も)
・ホストファミリーへのお土産
・リメンバランス
・除菌シート
・ポケットマネー
・日焼け止め
・筆記用具

あったら便利品

・リセッシュ
・ハンガー
・雨具
・レターセット
・ビニール袋
・子どもが喜びそうなおもちゃ(シャボン玉等)
・帽子
・鏡
・全身拭くタオルかシート
・携帯扇風機もしくはうちわ

≪改善点≫

・オーガナイザーさんと早め早めに連絡を取る。(フィリピーノの時間感覚を理解する)
・団長と国渉どちらが連絡を取り合うかハッキリさせる(オーガナイザーさんが混乱する為)
・自分に任せられた仕事は早めに動く、後回しにしない。
・交通手段は特に前もって調べていく。(Grab アプリ入れていくとか)
・タクシーは Grab 以外 100%ぼったくりだと思って良い。もし乗るなら「いくらですか」と聞くのではなく、最初に値段を言うかメーターを切ってもらう。
・簡単なタガログ語は話せるように勉強していく。

≪事前勉強会報告≫

日程　2/16～2/17

場所　マンションの一室

スケジュール
2/16
16 時現地集合
～16 時 20 分　プロジェクターなどの準備
16 時 20 分～16 時 50 分アイスブレイク、プレゼン最終確認
16 時 50 分～17 時 00 分団長から挨拶兼連絡
17 時 00 分　勉強会パワポ発表各班
①チーム 1 地理気候動物　10 分
②チーム 2 歴史日本との繋がり政治　10 分
③チーム 3 料理衛生　10 分
④チーム 4 流行スポーツなど　10 分
⑤国旗言語　10 分
17 時 50 分～18 時 00 分休憩
18 時～19 時半文化紹介概要説明 and 詳細決め
19 時半～20 時半　ダンスの練習
20 時半～　夕食
22 時　部屋の風呂で風呂入るその他もろもろ
24 時までに就寝

2/17
起床時間自由但し 9 時までに準備完了させる
9 時～9 時半　フィリピン Ex 概要確認と注意事項確認
9 時半～10 時　各係からの連絡①報告係 5 分
②Ex 服係料金説明 and 徴収 10 分
残り時間伝えたいことがある係から連絡
10 時～10 時半　昨日のやり残しの消化、ない場合はダンス練習

10 時半～10 時 45 分　片付け退去準備
11 時　完全退去 and 解散

勉強会の重要性

神戸支部　北村美帆

勉強会決戦の地は谷町 9 丁目駅すぐの Sumicco というエアビーである。
プロジェクターに投影される画面がぐちゃぐちゃな点以外は良かった。
わたしは今回の勉強会を通し、勉強会の重要性に気付いた。
それは、ex 本番で初顔合わせするより、泊まりがけでお互いのことを知ってからのほうが、メンバーの結束力ががぜん強まるということだ。
実際私たちは、カレーを作ったり、ダンスの練習をしたり、夜はハンガーゲームを観たりと共に一夜を過ごすことで心の距離を縮めていった。
よって後輩達には「泊まりで、エアビー」を強く推奨したい。

≪日別活動報告≫

●Day1　　神戸支部　藤本　優梨花

私たちはこれから始まるEXに大きな楽しみと少しの不安を抱えながらホテルのロビーに集合した。その後現地の大学生達と合流し、博物館やマニラ料理を満喫した。特に私の中で印象に残ったのはイントラムロスだ。移動中の車の中から、フィリピンの街並みとは全く違うヨーロッパ風の街並みが現れたことに私はとても驚いた。

そこは、16 世紀にフィリピンを統治していたスペインによって建てられた都市だったのだ。そこで私はようやく、飛行機内や街中やレストランなど様々なところにスペイン語が表示されていることに納得した。

要塞内にホセ・リサール記念館があった。彼はフィリピンをスペインから独立させた英雄なのだという。大学生たちがとても彼について詳しかったためその理由を聞くと、彼自身が一つの教科になっているのだと教えてくれたのだ。さらに、日本人にとっての英雄を聞かれた私は、はっきりと答えられなかった。日本の歴史上の人物で英雄はたくさんいることはわかっているのに、説明できるほどの知識をもっていなかったことを恥じた私は、自国についてもう少し勉強する必要があるなと刺激を受けた。

フィリピンについての知識が少しつき、現地に行って学ぶということの大切

さを身に持って実感した１日であった。

●Day2　　神戸支部　北村　美帆

いよいよファームステイ初日、ついにこの日がやってきた。
朝食を食べたらすぐに空港へ向かい、1 時間弱のフライトでバコロド島に到着。まずは Food park というところで腹ごしらえをする。ここのガーリックライスはいままで食べたガーリックライスの中で一番私たちの口に合っていたように思う。マルディーさん曰く、ファームでなにか危険なことがあったら food park へと駆け込めとのこと。走っていくには遠すぎる。

車に 15 分揺られて着いたのはチキータという村。広場を取り囲むように家々が建っている。いかにも村長っぽい出で立ちをした村長の挨拶が終わると、皆それぞれのホストファミリーの家へ向かう。荷物を置いたらまた広場へ。子どもと遊ぶぞ！と意気込んだは良いものの、いざ彼らを前にすると何をどうして遊んだら良いのかわからない。この時が村に来て一番の緊張の瞬間だった。遊んで見せるのが手っ取り早いと考え、まずは日本人同士でおにごっこを始めてみた。「タッチ！」「…タッチ！」はじめは子どもたちの視線が痛かったが、ルールが分かった子が次から次へと加わり、最終的に 20 人ほどで遊んだ。予想外だったのは、こどもたちが「give me! give me!」と鬼について回り「タッチ」を必死に欲しがっていたこと。初めて見る光景で可笑しかった。鬼ごっこを仕掛けた張本人は疲れて降参。それでも遊びまわる子どもたち。彼らの体内には体力の泉があるのではないかと疑うほどだった。

こんなに全力で遊んだのはいつぶりだろう…シーツの上でトタン屋根を見上げながら感慨にふける。と同時に、明日はサトウキビ農園とマングローブにいくことをふと思い出した。「そのあとは何するの？」隣で横になるゆりかに聞いてみた。「フリーだよ」「え？」この時わたしは初めて、明日も明後日も明々後日も子どもたちと走り回る自分を想像した。
もっと省エネでできる遊びを考えなければならない…知恵を絞りきらないうちに眠りに落ちた。

(縄跳びを蛇に見立てて遊ぶ日本人とそれを不思議そうに見つめる子どもたち)

●Day3　　神戸支部　米谷　萌

この日は朝 5 時半に起きて、6 時にさとうきび畑へ向かう…予定だったが、そもそも朝ごはんを食べ出したのが 6 時だった。そして他のメンバーも全然集まらない。(皆んなまだねてるんかな…？)マザーに大丈夫なのか聞くと「今日は大丈夫」と言っていた。さすがフィリピーノタイムである。結局、さとうきび畑へ向かい出したのは 7 時頃だった。村から少し歩いた所に、さとうきび畑が広がっていた。私達が着いた頃には、もう皆んなせっせと働いていて、私達も鍬を渡され、苗に向かって土を耕していく作業を手伝いはじめた。少し作業が終わると、さとうきびを食べてみないか？と言われて、その場でさとうきびの皮を削って食べさせてくれた。皆んな必死にかぶりつく。歯応え良く、しっかり甘かった。さすがさとうきび。このさとうきび畑が、この村の生計を立てているのだ、と考えるととても感慨深かった。結局、さとうきび畑の滞在時間は 20 分程度で、手伝いというよりは、見学&体験という感じだった。そこからまた村へ帰ってブレイク、お昼ご飯を食べ、少しのんびり過ごし、2 時ぐらいから今度はマングローブへ、ホストファミリーも含め、皆んなでトライシクルに乗って向かった。マングローブと聞くと、水の中に木が生えているのをイメージしていたが、ここのマ

ングローブは土の中に埋まっていた。マングローブの中を橋で渡ると奥に砂浜が見えてきた。高台もあり、上から辺り一面を見渡せる様になっていた。海辺では、最年長男子が最年少女子達に「飛び込め飛び込め」といじめられていた。しかし張本人は、とても嬉しそう&楽しそうだった。結局飛び込んで、びちょびちょになった姿にホストマザー達も呆れ顔。1 時間ほどで村へ帰り、また子どもたちとの遊びが始まった。相変わらず今日もパワフルな子どもたち。日に日に見かける人数が増えていく気がするのは気のせいだろうか。この日の晩ご飯には、マザーがマングローブ付近の出店で買ってくれた蟹の料理が出てきた。とても美味しかった。明日はついに小学校へ行って文化紹介だ。もう一度ティーチングのシミュレーションをしてから寝ようと思ったが、ホストシスターが寝る間際までひたすら喋り倒してきたこともあり、結局、疲れすぎてすぐに眠ってしまった。

●Day4　　大阪支部　藪内　冠太

「カンタ、SING!!」子どもたちが叫ぶ。そして、声を振り絞り let it go を熱唱する。20 回は繰り返しただろうか、そして今日はその記録を大幅に更新するに違いないと私は確信していた。そう、この日は小学校、中学校へ文化紹介をしに訪れることになっていた。Day3 ほどではないが早起きをし、小学校に向かう。大きな校門を通過し、教室に入る。すると、一息つく間もなく子ども達の大群が教室に押し寄せてきた。私達は折り紙班、書道班に分かれ、準備を急いだ。私は折り紙班に所属しており、鶴を折ることになっていた。団長が皆の前に立ち、紙を折り始める。「ライクディス！！」力強い声がこだまする。授業の前に折り方を復習すればなんとかなると考えていた私は、ただ子ども達とともに団長が紙を折る姿を眺め、真似ることしかできなかった。そして、千手観音のように子ども達の手が私の元に伸びる。「折れ。」言葉は通じないが、そう言われている気がして、鶴ではないが鳥っぽい生き物を折ってなんとかその場をやりすごした。授業後、子ども達からフィリピン語講座を受ける。何を言っているか分からないがとにかく復唱する。そして笑いが起きる。私は Day4 には既に子ども達のツボを抑えていた。次に、学校にある畑に向かった。なんの説明もされず、子ども達が木のような棒で地面の土を掘り起こし始めた。なるほど、木を植えるのだな。私はここでふと、このＥＸの自らの目標を思い出した。「漢気を見せて引退する。」である。ここしかない。そう思い、木の棒を子どもから受け取り、必死に土を掘り起こす。後日写真を見返すと、皆の眠そうな顔がそこにあった。午後からの中学訪問は中止になってしまい、村に帰ると、むきむきな男たちがバスケットボールをしていた。俺も強い男になろう、そう決心した一日だった。

●Day5　　神戸支部　高橋　菫

ファームステイも終盤となり、とうとう帰る日が明日に迫った。この日は 9 時から市場に行きフィーディングのための買い出しをした。肉や魚、野菜が常温のまま置かれ、ふとあたりを見渡すと豚と目があってしまった。千と千尋に出てくるような豚の顔が市場のテーブルに置かれていたのだ。そんなことで驚いている間にホストマザーたちが買い出しを済ませてくれていた。村に帰って、夕方まで暇をしていた私たちは、村の子供達と外で書道をすることにした。これこそ青空教室である。みんなハイスピードで筆を動かし、あっという間に紙がなくなった。一人の男の子が私たちの似顔絵を描いてくれた。つっこみどころ満載だったがすごく嬉しかった。
夕方になり、子供たちにフィーディングをした。買い出しもそうだったが、調理もホストマザーがしてくれた。そんなこんなでフィーディングの時間も終わり、広場にみんなのホストマザーやホストファーザーが来てそれぞれの思いを話してくれた。そのあと子供たちがダンスを披露してくれた。日本人も加わり、みんなでパプリカとフィリピンで有名なタラという曲に合わせて一緒に踊った。涙か汗かわからなくなるほどはしゃぎまくった。子供たちと遊ぶのも今日で最後なんだと思うと寂しくて悲しくて涙が止まらなかった。別れを惜しんで泣いてくれる子供たちを見てまた涙が溢れた。もうあほほど泣いた。村での最後の夕食を済ませた後も子供たちと夜遅くまで遊んだ。まだ帰りたくないなあ、この夜が明日もあればなあ、と何回も思った。家に帰るとホストファミリーとその友達たち計 8 人がお酒を飲みながらナイトパーティーをしていた。私もそこに加わってラストナイトを最後まで楽しんだ。この村に来て日本では経験したことのないことをたくさん経験した。決して整っているとはいえない環境だったが、ここで出会った人やここでできた思い出はかけがえのないものとなった

Mahal kita (マハラ　キタ)!!　みんながだいすき!!

●Day6　　神戸支部　津田　理々香

　急遽、帰ることが決定し、この日が最終日となりました。
　朝、ファームステイ最後の朝食を食べました。村の広場に向かうと、金曜日で登校日だったにもかかわらず、村の子供たちが学校を休んでまで私たちを送り出そうと集まっていました。

　帰りの飛行機までの時間に私たちは美術館に行きました。そこで、写真や作品１つずつ丁寧に解説していただきました。その中で最も印象的だったのはフィリピンでのヒーローについての話です。私たちにとってヒーローは 1 人の人を指しますが、フィリピンではヒーローに人数は関係ないそうです。たくさんの人と助け合うフィリピンでの習慣が影響しています。この話を聞いて、この国の温かさを再認識させられました。

この後、昼食、夕食を食べ、マニラに立ちました。マニラでは人生初の空港泊を経験しました。みんなで仲良くマクドナルドで過ごしました。
　予定されていたプログラムの半分だけとなってしまいましたが、メンバーや

村の人との絆は私たちにとってかけがえのないものとなりました。

≪フリーエッセイ≫

「思い出いっぱいファームステイ」

神戸支部　津田　理々香

私にとって今回のフィリピン EX が ISA での初めてのプログラムでした。初プログラムで海外に行くことはとても不安でいっぱいでしたが素晴らしい経験ができたと感じています。

　ファームステイでの生活は、私が今までに体験したことのないような生活でした。フィリピンの村では「発展途上国の生活」として多くの人が想像するような質素な生活がゆっくり流れています。シャワーもなければ蛇口もないような家で 4 日間もやっていけるか初日は心配していましたが、最終日には村の生活に対応できるようになりました。また、村の人は子どもから大人までみんなが無邪気で温かく、私たちを迎え入れてくれました。

　スマホやインターネットで成り立っているような日本とは対照的なフィリピンの生活を経てたくさん成長できたかと思います。

「幸せを感じた 6 日間」

神戸支部　高橋　菫

　今回のフィリピン Ex.で一番印象に残っているのはファームステイです。ネグロス島にあるチキータという村で、4 日間一家庭に二人ずつ日本人が滞在しました。私のホストブラザーは what will you go?が口癖で、4 日間たくさんのところに連れて行ってくれました。どこに行くのもトライシクル(バイクに肩輪のサイドカーがついたようなもの)で移動し、これがすごく楽しかったのでフィリピンに行かれる方は是非乗ってほしいです。ジプニーという(形はバスに近い)乗り物にも乗りました。２つともフィリ

ピンのローカルさを存分に味わえると思います。私の滞在した家は夜になるとナイトパーティーといって、家族だけでなく近所の人や友人と一緒に夜遅くまで飲んだり喋ったりしていました。普段割と一人が好きな私ですが、すごく居心地が良くて、人が集まる場所があるって素敵なことなんだとこの家に来て思いました。また村には子供たちがたくさん居てほぼ毎日一緒に遊んでいました。みんなとにかくパワフルで無邪気で可愛かったです。最終日にはダンスを披露してくれて別れを惜しんで泣いてくれる子供もいて涙が止まりませんでした。パプリカとフィリピンで有名なタラという曲に合わせて一緒に踊ったことも一生の思い出です。どの国でもみんなそれぞれ生活の水準は違うし、お金の使い方も違いますが、フィリピンでは家族や親戚、友達など人と人とのつながりを 1 番に大切にしていると感じました。ここに来る前は、シャワーもなく冷水だったり、狂犬やトイレ事情などで色々心配していましたが、そんな心配をしていたことが申し訳なくなるぐらい素敵な村でした。一見何もないように見えるこの村ですが、豊かな自然と幸せを感じながら生きている人たちがそこにはありました。日本という比較的恵まれている国で生活していて当たり前のようになっていて大切なことを忘れていたり、フィリピンに来て見習うべきところがたくさんあることに気づきました。今回はリスケジュールがあり、シティの生活ができなかったのが残念でしたが、約 6 日間幸せを感じることができたと思います。経験値もはね上がりました。今回フィリピン Ex.に参加できたことを心から嬉しく思います。またこの経験をこれからの挑戦に活かしていこうと思います。

「フィリピーノのあたたかさ」

神戸支部　米谷　萌

　私が今回の Ex.を通して 1 番感じたことは、フィリピーノのあたたかさです。言葉が通じないとコミュニケーションは取れない、そんなことは一切ありません。実際、村の小さな子ども達は、あまり英語が通じません。彼らは母語であるタガログ語を使っているからです。言葉が通じなくても、子ども達はすぐに名前を覚えてくれて、いつも無邪気に「Moe! Moe! 」と遊びに誘ってくれました。主に鬼ごっこや手遊びといった非言語的要素のコミュニケーションが私達を繋いでくれました。村では家族関

係なく、皆んな互いに優しく仲がよかったです。そして、日本から来た私達にも家族同然に接してくれました。怪我をした時は全力で心配して、大丈夫だと言っているのに、何度も大丈夫か聞いてくれて、突然の帰国手配で動揺を隠せず、不安になっている時は「そんなにシリアスな顔しないで！大丈夫だよ！」と何人ものフィリピーノが優しく声を掛け、心に寄り添ってくれました。クールな私は「ありがとう！大丈夫だよ！」とあっさり返すことしかできませんでしたが、心の中では涙が出るほど嬉しく、同時にフィリピーノのあたたかさを深く感じました。村にはたった 4 日間しかいなかったけれど、今でもフィリピーノの優しさ、明るさ、笑顔、そして家族の枠を超えたフレンドリーさが忘れられず、心に刻み込まれています。

言葉が全てじゃない、言葉が通じなくても、素敵な繋がりを築くことができる、そんなことを改めて感じることができた Ex.でした。

「衝撃体験！ファームステイのトイレとシャワー」

神戸支部　北村　美帆

ホームステイ先に着いて初めて抱いた感想は、「早くファームステイ終わって欲しい」だった。なぜなら、便器が剥き出しになったトイレや、トイレでシャワーを浴びること自体、自分の人生とは関係ないと思ってこれまで生きてきたからだ。実際、フィリピンで一番大変だったのは迷わずトイレとシャワーだと答えられるほど、それらはわたしにとって忘れられない経験になった。本題に入る前に、ホストファミリーの家での生活について書くことをお許しください、パパとママ。

まず、一番抵抗を感じていたトイレについて。用を足した後に桶で水を掬って流す仕様なのだが、慣れてくればこの作業が案の定たのしかった。水洗トイレとは違い、一度のトイレでどのくらいの水が必要なのか体感できる。また、便器が剥き出しになっているで、空気椅子の姿勢を維持できる限界までに用を足すタイムマネジメント力が養われた。

トイレより大変だったのはシャワーだった。シャワーといってもトイレで桶の水を被るのだが、トイレ部屋で浴びることに抵抗があったため短時間で済ませるべく、私たちは 2 人でシャンプー作戦に行き着いた。

「We want to take a shower」そうパパに声を掛けると、何も言わずにバケツに水を汲んできてくれた。わたしたちは短パンにキャミソール姿になり、代わりばんこに頭を流した。結局身体は一度も洗わず、寝る前に濡れたタオルで拭くだけだった。

頭を洗ったのは 4 日間のうち真っ昼間に 2 回のみ。シャンプーをしても夕方には汗だくになることを分かっていたが、暑い中の水浴びはとても気持ちがよくて幸せな時間だった。

無事ファームステイを終えた日、安心と達成感に包まれた。しかし、わたしが体験したのは生活のほんの一部に過ぎない。自分が生きることに夢中で、一度も料理の手伝いや水汲みもしなかった。

今度あの村に行く時は、自力で井戸から汲んできた水でシャワーを浴びたい。そうして初めて、水の大切さを実感できると思うから。

「“The warmth of Philipino”」

神戸支部　藤本　優梨花

私たちがお世話になったバコロドの別名は「微笑みの街」だとコーディネーターさんが最終日に教えてくれたのだ。確かにそうだなと感じる点がいくつも思い出された。

私と友達でスーパーに行き、帰りに大雨が降っていたためタクシーをつかまえてホテルに戻ろうとしたところ、隣にいた同い年くらいの男の子が率先してびしょ濡れになりながら何回もバスやタクシーの運転手に私たちを乗せてくれるよう頼んでくれたのだ。最後にはバスをつかまえて私たちを乗せてくれ笑顔で見送ってくれた。こんな素敵な男の子のこと、私は絶対忘れないだろう。

特に 4 日間もお世話になった村では、涙のお別れをするくらいの温かさを村の人たちからたくさん感じていたのだと思う。とくに日本人にとても懐いてくれた子供たちは、毎日一緒に遊んでいる中でも時々「Yurika, Are you tired?」と体調を気にかけてくれるのだ。さらに、日本人の 1 人が遊んでいる途中に転んでしまった時、村の子供達はいっせいにその子の周りを囲んで心配そうに声をかけてあげていたのだ。当たり前のことをしているように見えるが、あんなに小さい子どもたちがそう簡単に出来ることではないだろう。私よりよく周りを見ることが出来て人のことを気にかける心の余裕を持っている子ども達に本当に素敵だなあと心から感心した。こんな温かい心をもてたのは、狭いからこそ全員を家族だと思えるような素敵な村で育ったからだと思う。

今回のフィリピンの旅がこんなにも充実したのはフィリピン人の温かさを常に感じることができたからだろう。

「フィリピンのファームでの生活」

大阪支部　野口　綾乃

今回は新型コロナウイルスの影響でプログラムの約半分を行うことができなかったがとても充実した一週間でした。

今回フィリピンＥｘに参加した理由の一つに子どもたちとの交流があったからです。村の子どもたちはとても元気ですぐに打ち解けることが出来ました。子どもたちは 0 歳児から大学生と幅広い年齢層で小・中学生が多かった印象でした。

ファームステイは 4 日間と短い期間ではあったがとても濃い時間を過ごしました。特に村の子どもたちと一緒の過ごした時間とお世話になった家族との時間は私の宝物です。村の子どもたちはたくさんの遊びを教えてくれました。手遊び、トマト・サラダ（正式名称不明）、などです。トマト・サラダは大人数でする遊びで、「綾乃、トマト・サラダやろう！！」と子どもたちが誘ってくれて毎日しました。でも、走るので疲れましたがとても楽しかったです。この他にもバレーボール、バスケ、鬼ごっこ、Tala ダンスなどして遊びました。また、プレゼントとして持ってきたシャボン玉、紙風船、縄跳び、けん玉など子どもたちは喜んで遊んでいました。そして、アルプス一万尺が大好きということを知りました。

村には本当にたくさんの子どもたちがいましたが、私がお世話になった家族にも子どもたちがいました。全員が女の子でみんな両親に似ていてグアパ（かわいい）でした。得に末っ子の子は 4 歳なので最初はあまりスキンシップが取れませんでしたが後半は手を放してくれなかったり追いかけっこ、竹とんぼ、折り紙、体をくすぐったりしてスキンシップをかわしました。また、三日目の夜に中学生の子が髪の毛を編み込んでくれました。あんな風にしてもらったのが初めてだったのでとても嬉しかったです。また、子どもたちと一緒に折り紙、竹とんぼを毎夜して楽しかったです。

ファームステイではお世話になったママが 3 月 3 日が誕生日だったので折り紙で作ったバースデーカードを送り喜んでくれました。そして、みんなでケーキやピザを食べました。とても美味しかったです。私はパパとはその日の夜に初めて会いました。パパはかっこよくて素敵な人でした。パパはその日しか家にいなかったのであまり話はできなかったです。もっとたくさん話がしたかったことが心残りだが、携帯があればいつでも話はできるので嬉しいです。また、毎回の食事のときにママがナプキンで様々な形を作ってくれて嬉しかったです。そして作り方を教えてもらいました。ご飯の時以外は子どもたちと遊んだりテレビをみたりして過ごしました。私は最初家族のみんなとあまりコミュニケーショ

ンをとることができなかったが後半はファームでの生活にも慣れて少しずつだがコミュニケーションを取ることができました。
　今回は新型コロナウイルスの影響で半分しかプログラムを達成できなかったが有意義な一週間を過ごせて幸せでした。また、たくさんの方の元でフィリピンにいけたことに感謝します。来年、フィリピンＥｘが開催されるならばまた行きたいです。

「フィリピン EX 総括」

大阪支部　藪内　冠太

自分にとって、今回のプログラムは日韓学生会議 58 以来のプログラムだった。コミとしてやりきり、もう思い残すことはないと考えていた自分がまさかもう一度プログラムに参加するとは思ってもいなかった。そう、私は去年追いコンで ISA から送り出されていた。このフィリピン EX では多くの学びを得ることができた。(巷ではバチェラーと言われていた)。最年長としてなんとかみんなを守らんとーとか、すこしでも不安を和らげてあげんとーって最初はめっちゃ考えてた。だからフィリピンについた時は気が気じゃなかった。当時のおれに言うことがあるなら、もっときーぬいても大丈夫や、みんな思っとるより強い。と言いたい。フィリピン EX で得たものはたくさんあるけど、一部を紹介します。まずは可愛い後輩たち！フィリピン EX の後輩たちを一言で表すなら、マイペース笑 みんなけっこう自分の時間で動くタイプだから集合時間はあってないようなものだった笑 でもだからこそ個性いっぱいでおもしろかった。怒涛の 6 日間を乗り越えた仲間たちやし、こんな圧倒的年上の先輩でも受け入れてくれた仲間たちだから本当に大切な後輩達です。切実に、また集まりたいなって思う。いやほんまに呼んでください。次に、フィリピンに対するイメージ。リゾート、海！っていうイメージだったけど、文化的に素晴らしい面がたくさんあるんやなと学んだ。圧倒的な美術館量のおかげだと痛感した。次に、発展途上国の現実。日本等の先進国と比べ、努力に見合った賃金が支給されていない現実を知り、見た。日本に生まれたという環境に感謝しなくてはいけないし、こういう格差をなくしていくことが大事だなと感じた。最終学年として、ただの卒業旅行では得られない色んなことを学んだ EX だった。みんなに感謝、フィリピンに感謝！

「フィリピンで見たもの」

九州支部　児嶋　桜

私は今回のフィリピン Ex では普通の旅行では味わえないような景色を見ることができた。現地の学生と交流したり、ファームステイをしたり、とても充実した日々であった。
その中でも一番印象に残っているのはファームステイだ。村での活動もそうだが、ごはんやお風呂など、日常生活ひとつひとつがとても新鮮だった。例えば、サトウキビ畑の体験では畑仕事の大変さを知るとともに、これからはもっと食べ物を大切にするべきだという事も再確認できた。また、現地の子どもとの交流の際には教育の大切を学んだ。一生懸命に学ぼうとする姿は輝いていた。
さらに、豊かさとは何かという事もとても考えさせられた。そして、まだまだ考えるべきこと、体験するべきことが多いと気づかされた。今回感じたことをこれからの ISA としての活動、自分の将来につなげていきたい。

≪編集後記≫

大阪支部　藪内冠太

今回のフィリピン EX を開催するにあたり、新型ウイルスの影響を顧み、様々な議論がなされ、多くのサポートをいただきました。深く感謝申し上げます。

さて、今回の EX は上記ウイルスの影響を大きく受け、予定していたスケジュールの変更が多くあり、更に途中帰国を余儀なくされました。しかしそうした逆境の中でも、自らの成長のみならず、皆の成長が多く垣間見得た会期となりました。フィリピンに到着した当初、私の行動に多く頼っていた後輩が、会期後半には自ら積極的に前に出てチームを引っ張る姿。村の厳しい生活環境を通して、日本での生活に感謝の心を覚えると同時に、その生活環境に適応しようと必死に努力する姿。短い間でしたがお世話になった村の人々との別れを惜しみ涙する姿。こうした様々な姿を見ることができました。

今年のフィリピン EX のテーマは「前進」でした。日別報告書、エッセイの内容からも分かる通り、皆それぞれ多くのことを得て、そして人間として前進できたのではないでしょうか。そして私が、私自身にそしてメンバーに対して望むことは、このフィリピン EX で得られた「前進」を今後も活かして欲しいということです。I.S.A.の別のプログラム、別のサークル、自らの趣味、授業やバイトなど人それぞれ様々なフィールドがあるかと思いますが、今回得た「前進」が活きる機会は必ずあるはずです。「伝える」、「応用する」ことが大切なのではないかと考えます。

最後になりますが、今回の EX では上記のように様々なことを得ることができました。こうした機会をいただけたのも、現地オーガナイザーさんや全代の方々など、多くの方のご協力や苦悩があったお陰であると、深く痛感しております。誠にありがとうございました。そして、僭越ながら、今後ともフィリピン EX をよろしくお願いいたします。

発行元　International Student Association（日本国際学生協会 I.S.A.）
発刊日　2020 年 3 月 31 日
報告書係　藪内冠太

Philippines EX.2020